

新吉は毎日海岸で観音經をやつた

千葉の小湊や、天津や浪太邊りよりも雄大だつた。鱒の骨が轉がつてゐたりした。

彼は雪を踏んで、金が無くなつたので停車場へ行つて、宿の亭主や女中が後から追つ驅けて來た。

荷物を全部抵當に置いて、金をとりに一度東京へ引きかへした事があつた。

夜コツソリ中平の家の邊りを彷徨いたりもした。

久子がイボンヌを負ぶつてゐて、道をよけて、恐ろしそうに一度醫者の家へ行くのを見た。

國府津邊りまで歩いて行つたりした事があつた。

眞言宗のお寺があつた。

其處には青木と云ふ若い坊さんが居た。若い細君も居た。珠數と弘法大師の傳記本を呉れた。

新吉は事實、春子と結婚したく思つてゐた。

春子の家は甘酒屋の奥の方だつた。

貧弱な麥藁家だつた。